

Title	A Verray, Parfit Gentil Knight' : The Knight's Tale における人間の nobility
Author(s)	後藤, 秀子
Citation	Osaka Literary Review. 13 P.27-P.38
Issue Date	1974-11-25
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25736
DOI	10.18910/25736
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

‘A Verray, Parfit Gentil Knight’

—*The Knight's Tale* における人間の nobility

後 藤 秀 子

I General Prologue の騎士像

Canterbury Tales のプロローグの中に登場する人物のうち、まず第1に紹介されているのは騎士であり、物語を1人ずつ始めるにあたって、その順番をくじで決めた時、最初の話し手にあたるのも騎士である。当時の身分階級からいって、様々の人々から構成されている巡礼たちの中で、騎士は最も身分の高い人物であり、しかも人格を兼ね備え、最初の話し手として最も適当な人物にあたったと、他の巡礼たちは心から満足するのである。

Anon to drawn every wight bigan,
And shortly for to tellen, as it was,
Were it by aventure, or sort, or cas,
The sothe is this, the cut fil to the knight,
Of which ful blythe and glad was every wight;

(ll. 842—846)

さて、こうして *Canterbury Tales* の中の最初の物語、韻文では最も長い物語が語り始められることになるのであるが、tale を論じていく前に、この語り手である騎士の姿に注意をむけてみたい。というのは、この *Canterbury Tales* において、tale と語り手というものが非常に密接な関係を持っていると考えられるからである。いいかえるなら、語り手の存在を無視して、tale のみを考えることはできないのである。そこで tale の内容については、次の章から論じていくことにして、この章においては、

taleを語る語り手、騎士の姿を掘りさげていこうと思う。General Prologueに描かれている騎士の叙述でまず一番に気がつくことは、彼の chivalric honor が、非常に強調されていることであろう。騎士についての叙述の半分以上が、その武勲の列挙に費されている。しかもチャーサーは、この騎士の像をよりリアリスティックにするため、当時の人々の記憶にまだ新しい戦いのあった地名を用いている。⁽¹⁾11世紀から13世紀にかけて、華々しく行われた、十字軍遠征——それは結果として中世封建社会の崩壊をもたらすものであったが——その当時ほどの騎士道の華やかさはもはやないとはいえ、過去の栄光を夢見る貴族たちにとって、勝利を納めた数々の戦いに参加し、その武勇をはせたというこの騎士は、まさに当時の騎士のかがみともいうべき姿を、彼らの胸に彷彿とさせたであろう。

このように華々しい武勲を持つ騎士ではあるが、彼の性格については、その後少し述べられ、‘a verray, parfit gentil knight’（真に完全なる立派な騎士）と要約されているだけである。若い頃から騎士道の教育を受け、数々の武勲をたて、しかも物腰穏かで、礼節を非常に重んじる騎士であることはわかるが、そういう騎士の姿は最後の6行によって具体的な1人の人間の姿をとって、読者の胸に焼きつく。

But for to tellen yow of his array,
His hors were gode, but he was nat gay.
Of fustian he wered a gipoun
Al bismotered with his habergeoun ;
For he was laté y-come from his viage,
And wente for to doon his pilgrimage.

(11. 73—78)

立派な馬に乗ってはいるが（立派な馬を持つことが立派な騎士としての条件である）その身なりは実に質素で、遠征から帰ったばかりらしく汚れているという。おそらくこの騎士は、戦勝を感謝せんために、帰国早々、カンタベリーまでの、この巡礼に馳せ参じたのであろうことが容易に想像される。この騎士の数々の華やかな武勇談を聴かされてきた読者は、この

地味で誠実な騎士の姿の中に、真に完全なる立派な騎士——a verray, parfit gentil knight の具現を見るのである。

というところで、この立派な騎士の語る物語がどのようなものか、以下の章で論じていくことにしよう。

II 物語の中の3人の騎士

騎士の語る物語は、チャーサーの他の多くの作品、また他の中世文学の多くと同じく、原典が他にある⁽²⁾。ボッカチオの書いた *Il Teseida* がそれである。しかしチャーサーは、ボッカチオの10,000行近い叙事詩を2,250行に短縮している。これには、もちろん、*Canterbury Tales* という枠組の中にはめ込まねばならない構成上の理由もあるが、チャーサーが、この物語を、単なる壮大な一大叙事詩の直訳として扱ったのではないという内容的理由も考えられよう。ここで、この物語の主要人物である、Palamon, Arcite, Theseus の3人の騎士に焦点をあて、この騎士の語る騎士の物語を論じていこう。

1. Palamon と Arcite

3人の騎士のうち、2人の主人公 Palamon と Arcite は、2人を対にして論じよう。というのは、チャーサーは、この2人の dissimilarity より similarity の方に重点をおいて2人を描いていると思われるからである⁽³⁾。第1の理由として、2人の性格描写がはっきりと描き分けられていないことがあげられる。2人の性格分析、2人間の差異については、今まで多くの研究がなされてきた。しかし2人間の性格の違いは全く微妙であり、性格描写の美事なチャーサーを思えば、この2人は全く同じタイプの人間といえよう。さらに進んで、チャーサーは意図的に2人を1対として扱っていると思われる点はいくつかある。これが第2の理由である。2人が、戦い終わった戦場で戦死者たちの中から見つけ出された時の描写はこうである。

Two yonge knightes liggig by and by,
Bothe in oon armes, wroght ful richely,

'A Verray, Parfit Gentil Knight'

Of whiche two, Arcita hight that oon,
And that other knight hight Palamon.

(ll. 1011—1014)

そして彼ら 2 人は従兄弟である。

As they that weren of the blood royal
Of Thebes, and of sustren two y-born.

(ll. 1018—1019)

捕虜となり、牢に入れられた 2 人が Emeley 姫を見そめ、相争う様も、シンメトリーに描かれている。片方の独白には必ずもう片方の独白が対応し、片方の言葉に応じて、片方が言い返すというように。語り手は全くこの 2 人を、対等に、1 対の相争う騎士として扱っているのである。では、そうすることにより、どのような効果が生み出されているであろうか。2 人は、愛のために互いに争い合う、1 対のライバル、courtly lovers とし、この物語の 1 つの焦点となっているのである。2 人は幽閉された牢の窓から Emeley を垣間見、たちまちのうちに、恋の虜となり、典型的な courtly lovers となるのであるが、この物語の中には、2 人を使って、うつろい易い恋愛 (amor) に夢中になることの愚かしさが、あちこちに語られている。

2 人の騎士が恋する対象の Emeley であるが、彼女の登場は、5 月の朝早く、5 月祭りを祝おうと起き出して、庭を散歩するという、非常に conventional な状況においてであり、その描写も、百合や、バラに喩えられ、romance によく見られる、人間離れした、単なる偶像的な恋愛の対象にすぎない。彼女は、トーナメントの朝の Diana 女神への祈り以外は、一言もしゃべっていない。Criseyde のような、恋する女性の心理などは、彼女において全く描かれておらず、彼女は、ロマンスの heroine に終始している。このように、2 人が命がけで、得んものと欲する女性を、conventional に、偶像的に描くことにより、2 人の、love-blindedness に対する irony が感じられる。この 1 人の女性をめぐる、——しかもその女性は、彼らのことも、彼らがどれほど彼女を想っているかも、

つゆ知らないのであるが——激しく相争うこの2人の騎士を、Theseusは irony をこめで、次のように評する。

Who may been a fool, but-if he love?
Bihold, for Goddes sake that sit above,
.
.
.
She woot namore of al this hote fare,
By God, than woot a cokkow or an hare!

(11. 1799—1810)

また courtly love に特有の love malady も、convention にのっとり誇張されて描かれている。アテネを追われ、祖国テーベに帰った Arcite の異常なまでの悲しみは、典型的な love malady として描かれている。

Ful ofte a day he swelte and seyde 'allas,'
For seen his lady shal he never-mo.
And shortly to concluden al his wo,
So mucche sorwe had never creature
That is, or shal, whyl that the world may dure.

(II.1356—1360)

この表現は最上級を用いて fictin の世界を創り出す、伝統的な中世詩法の convention に、のっとり⁽⁴⁾ている。このような、異常な焦燥のため、Arcite は全く人相が変わってしまい、それを幸いに、彼は、見つかれば殺されるアテネに戻り、誰にも悟られずに、Theseus の宮廷に仕える身となるのだった。このように、何も知らぬ女性への死にも狂いの思いは、皮肉を混じえて描かれ、sworn brothers として、互いに助け合うことを約束し、忠誠を誓った崇高な騎士としての契りを忘れ去り、互いに憎しみ争い合う姿を語りながら、語り手は、愛の神 Cupid にこう呼びかける。

O Cupide, out of alle charitee!

(1. 1623)

これは、'O Cupid, lacking in all kindness!' という表面の意味ばかりでなく、Cupid—cupiditas (self-love), charitee—caritas (Christian love) を思いおこさせる。⁽⁵⁾2人の騎士の争いは、うつろい易い amor に

盲目となることの愚かしさを表わしていると考えられよう。そしてこの amor は、2人の立派な騎士としての nobility を蝕んでいくのである。nobility が失われていく有様は、動物のイメージを使って、次々に描かれる。義兄弟として、堅く忠誠を誓い合った契りも何のその、Emeley 姫を見たその瞬間から2人は、憎しみをむき出しにした仇同志となり、Arcite は、奇しくも、牢につながれたままで決して報われることのない2人の恋の争いを、犬が1つの獲物を得ようと互いにいがみ合う様に喩えている。

We stryve as dide the houndes for the boon,
They foughte al day, and yet hir part was noon ;
Ther cam a kyte, whyl that they were wrothe,
And bar away the boon bitwixe hem bothe.

(ll. 1177—1180)

こうして互いに憎しみ合ううち、Arcite は追放の身となり、Palamon の方も、牢から脱獄して、2人は町はずれの森で偶然再会し、互いに Emeley への気持が、さらに激しくなっていることに怒り狂い、決闘する。2人の争いは熾烈で、Palamon はライオンに、Arcite は虎に、それぞれ喩えられ、2人の争う様は、野豚が泡を吹いて相争う様子に喩えられている。そこに来あわせた Theseus も2人の争いを野豚の争いのように思う。

Thou mightest wene that this Palamoun
In his fighting were a wood leoun,
And as a cruel tygre was Arcite :
As wilde bores gonne they to smyte,
That frothen whyte as foom for ire wood.

(ll. 1655—1659)

He was war of Arcite and Palamon,
That foughten breme, as it were bores two;

(ll. 1698—1699)

そして Theseus の催す大トーナメント、2人の騎士が、互いに100人の騎士を率いて闘い合い、勝者が Emeley を獲得するという大試合が行われ

る。この闘いにおいても、再び Palamon は、ライオンに、Arcite はトラに喩えられている。激しい戦いの末、Arcite が勝利を納めるが、不慮の事故で落馬し、勝利の喜びも束の間、ついに死んでしまう。彼によって、愚かしくも哀れな2人の争いの escalation にも終止符が打たれる。このように、獣性をむき出しにした2人の争いは、彼らの、騎士として、人間としての nobility を侵したのであったが、運命、神々のいたずらに翻弄されても、2人の本質は noble knight であった。この nobility は、獣のように激しく憎しみ合い、争い合う2人の間に、時折チラリと顔を覗かせる。森で7年ぶりに再会した時、Palamon は武器を持っていなかった。Arcite は怒りに剣を抜きながらも、騎士として、彼を殺すのを思い留まり、翌日の決闘に備え、武具と食物や衣類を届けさせる。そして立会人もいない決闘の日、2人は互いに武具を身につけるのを、真の兄弟のように手伝い合うのである。

But, for as much thou art a worthy knight,
 And wilt to darreyn hir by batayle,
 Have heer my trouthe, to-morwe I wol nat fayle,
 With-outhe witing of any other wight,
 That here I wol be founden as a knight,
 And bringen harneys right y-nough for thee;
 And chees the beste, and leve the worste for me.
 And mete and drinke this night wol I bringe
 Y-nough for thee, and clothes for thy beddenge.

(11. 1608—1616)

But streight, with-outhe word or rehersing,
 Everich of hem halp for to armen other,
 As frendly as he were his owne brother;

(11. 1650—1652)

2人の争いがエスカレートし、そして急転直下、悲劇的な Arcite の死という高価な犠牲を払って、結末がもたらされた時、2人は、まるでうつぱりが取れたように、悪夢から覚めたように、noble knight に戻る。死の床に臨んだ Arcite は Palamon を立派な騎士として讃え、そうするこ

とによって、自分も立派な騎士として死んでゆく。

I have heer with my cosin Palamon
Had stryf and rancour, many a day a-gon,
For love of yow, and for my Ielousye.
And Iupiter so wis my soule gye,
To speken of a servant proprely,
With alle circumstaunces trewely,
That is to seyn, trouthe, honour, and knightheðe,
Wisdom, humblesse, estaat, and heigh kinrede,
Fredom, and al that longeth to that art,
So Iupiter have of my soule part.,
As in this world right now ne knowe I non
So worthy to ben loved as Palamon,
That serveth yow, and wol don al his lyf.
And if that ever ye shul been a wyf,
Foryet nat Palamon, the gentil man.

(ll. 2783—2797)

このように、本来立派な騎士であるこの2人は、恋愛によって（それは今まで見てきたように、皮肉な眼で描かれている）nobilityを失い、1つの獲物をめぐって醜く相争う、獣と化してしまったのである。彼らのこの、混沌とした争いに、結末をもたらし、再びnobilityを取り戻させたのはTheseusであった。

2. Theseus

Theseusは、この物語の中で、典型的な立派な騎士として描かれている。彼についての叙述には、‘gentil’ ‘worthy’ ‘noble’といったすぐれた騎士を表わす形容がふんだんに用いられている。（いずれも現在の‘noble’に相当すると考えてよいだろう。）最初から、少し例を拾ってみると。

Lete I *noble* duk to Athenes ryde, (1. 873)
This *gentil* duk down from his courser sterte (1. 952)
That Theseus, the *noble* conquerour. (1. 998)
Whan that this *worthy* duk, this Theseus, (1. 1001)
(Italics mine)

といった具合である。Palamon や Arcite に使われた動物のイメージは、彼に関して全く使われておらず、敢えて挙げるなら、彼は反対に、半人半獣の怪物 Minotaur を征伐した英雄である。Palamon と Arcite が、囚人として、また憎しみ争い合う恋仇として、愚かしく、不幸な日々を送るのに対し、Theseus は王として、立派な騎士として、美しい后とその妹と共に、万民に愛され、幸福のうちに一生を送るのである。まさに、'a verray parfit gentil knight' といえよう。

では、先ほど例を挙げたように、'gentil' 'worthy' 'noble' と形容される Theseus を通して、nobility は実際どのように描かれているだろうか。

遠征からの帰途、Theseus は、喪服を着て嘆き悲しむ未亡人たちの一団に会う。彼女らは、テーベの暴君に、王や貴族であった夫を殺され、今もそのなきがらを辱められているという。Theseus は非常に哀れんで、彼女たちのために、できるだけのことをしようと誓う。

This gentil duk doun from his courser sterte
 With herte pitous, whan he herde hem speke.
 Him thoughte that his herte wolde breke,
 Whan he saugh hem so pitous and so mat,
 That whylom weren of so greet estat.
 And in his armes he hem alle up hente,
 And hem conforteth in ful good entente;
 And swoor his ooth, as he was trewe knight,

(ll. 952-959)

女性に対しての礼節、身分高い者の没落した姿に対する同情、正義のための戦い、といった、中世騎士の理想像がここに見られる。また彼は、生き残った2人のテーベ貴族 Palamon と Arcite を終身牢につないだものの、友人 Protheus との友情に免じて、寛大に Arcite を身代金もとらずに、2度とアテネに戻ることも、彼に反逆することもないよう誓わして釈放する。7年後、狩に出かけた Theseus は、誓いを破りアテネに戻って来た Arcite と、彼の牢から脱獄した Palamon が、騎士としての慣習を

守らず、立会人も置かず、2人っきりで決闘しているのを見つけ大いに怒る。しかし理由をきいた後 Emeley たちが、涙を流して、彼ら2人の許しを願うと、慈悲深い Thesue の心は動かされ、和らいでくるのであった。

And on hir bare knees adoun they falle,
And wolde have kist his feet ther-as he stood,
Til at the laste aslaked was his mood ;
For pitee renneth sone in gentil herte.

(ll. 1758—1761)

そしてこの2人に、トーナメントで勝った者に Emeley を与えるという寛大な処置をとる。そして、トーナメントは、Theseus の寛大さ、慈悲深さを十分に反映している。出費をいとわぬ立派な競技場と神殿の建設、集って来た騎士たちへの歓待、トーナメントで死者が出ないための工夫、勝者にも敗者にも差別をしない心づかい。こういった、非の打ちどころのない立派な名君としての Theseus の態度が、次々と語られる。このように、nobility とは礼節、武勲、寛容、忠誠、慈悲といった徳を表わしていると言えよう。

この nobility の生み出すものは order (秩序)⁽⁶⁾ である。noble knight である Theseus は、世にはびこる不正を征服し、人民の上に平和と秩序をもたらし、その生活は穏やかな平安に満ち溢れている。ちょうど、nobility を失い、相争う Palamon と Arcite が、常に混沌と無秩序のうちに生きているのと対照的に。そして彼は、この2人の上に秩序をもたらそうと努めるのである。1人の女をめぐるの、2人の男の争いは、永遠に続く無秩序である。Theseus の言う通り、Emeley は「いくらお前たちが永遠に争おうとも、同時に2人の男と結婚することはできない」(ll. 1835—36) のであり、トーナメントという手段をとって、どちらか1人が、Emeley の夫として選ばれねばならなかった。そして Arcite の勝利と死という経過を経て、Theses は、この事件に秩序ある結末をもたらす。万民の祝福のうちに、Palamon と Emeley は結ばれ、彼らもまた、order

のうちに、平和で、幸福な一生を送ることになるのである。

I rede that we make, of sorwes two,

O parfyt Ioye, lasting ever-mo;

(ll. 3071—3072)

以上のような Theseus 像を見る限り、我々はこの物語の中で、いかに人間の nobility が、尊いものであるが、また、それによって、どのような秩序がもたらされるか、ということが、強く、繰り返し、強調されていることを知らざるを得ない。

今まで見て来たように、この騎士の物語は、すぐれた courtly romance の典型というより、人間の nobility を讃えあげた、きらびやかな中世絵巻といえよう。Charles Muscatine は、その著 *Chaucer and the French Tradition* の中で次のように言っている。

The *Knight's Tale* is essentially neither a story nor a static picture, but rather a sort of poetic pageant. Its design expresses the nature of the noble life,...The story is immediately concerned with those two noble activities, love and chivalry, but even more important is the general tenor of the noble life, pomp and ceremony, the dignity and power, and particularly the repose and assurance with which the exponent of nobility invokes order. Order, which characterizes the structure of the poem, is also the heart of its meaning.⁽⁷⁾

この中世絵巻の中央に据えられるのは、もちろん、Theseusであり、彼の上方、天上には、ギリシアの神々が座し、下界の人間の上に、その力を及ぼしている。彼の下方には、Palamon と Arcite が、互いに争い合い、彼らの恋の苦しみ、血を流しての闘い場面などが描かれ、絵巻の残りの部分は、Theseus の nobility を讃える、数々の場面で埋められ、一幅の、非常に均整のとれた、壮麗な絵巻ができあがっている。これが a verray, parfit gentil knight の語る物語の世界である。*Troilus and Criseyde* や、General Prologue の、美事な人間描写、性格描写を知る我々は、この物語そのものだけを取りあげて、その内容を論じては早計である。チャーサーは、騎士道も、もはや色あせ、立派な騎士が、昔の物語の中ぐらいにしか

見られなくなったような時代に、理想的な騎士に、理想的な nobility の物語を語らせているのである。この物語は *Canterbury Tales* という frame の中で、立派な礼節を身につけた騎士の語る物語としてみる時、初めてその生命を帯びるのである。

注

- (1) この史実については、W. W. Skeat の注に詳しい。*The Works of Geoffrey Chaucer*, Oxford, Vol V, pp.6~8
- (2) 「...大体、古い時代の文学作品は、こういうふうに既存のポピュラーな伝説、民話や、さてはロマンス、英雄物語のたぐいから歴史的事実にしたるまでが、いわば、換骨奪胎するかたちで提供されるのが普通であった。...作家の前にひとつの完成されたものがあって、これにどのように反応してゆくか、その中に何を確認してゆくか。中世においては、そういう反応や確認が文人の想像力であると考えられていた。」上野直蔵、「ショーサアの『トロイラス』論」、南雲堂、1972、pp.1—2
- (3) '...Although many critics have stressed "defferences" in Palamon and Arcite, saying, for example, that the former is the more contemplative man, and that the latter is the man of action, it seems to the present writer that Chaucer has placed his own emphasis on similarities rather than on any dissimilarities.' Muriel Bowden, *A Reader's Guide to Geoffrey Chaucer*, Thames and Hudson, 1967, p.30.
- (4) 'It is typical of medieval poetry, and particularly of romances, to present a fictional world in which everything is superlative....The extreme thus becomes a quality of the invented world itself rather than of any particular incident within it.' A. C. Spearing ed., *The Knight's Tale*, Cambridge, 1966, p.155,
- (5) *Ibid.*, p.16
- (6) noble という形容詞が、人間以外の物を修飾している例の1つに、
That swich a noble theatre as it was,
I dar wel seyen in this world ther nat.

(11. 1885—1886) (Italics mine)

があり、この 'noble theatre' が円型であることから (ll. 1887—1892), P. M. Kean が、この建造物が 'an expression of Theseus' ability to achieve a perfectly ordered arrangement' であると言っているのは (*The Art of Narrative*, Routledge & Kegan Paul, 1972. pp.21—22), 'noble' という語に 'order' の connotation があることが考えられて興味深い。

- (7) University of California, 1964, p.181.

なお、引用は、W. W. Skeat ed., *The Complete Works of Geoffrey Chaucer*, 2nd ed., Oxford に拠った。